

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 ( 心 理 学 )	氏名	渋 川 瑠 衣
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>大学生における関係的自己の可変性に関する風景構成法を用いた検討</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 岡 本 祐 子</p> <p>審査委員 教 授 森 永 康 子</p> <p>審査委員 教 授 杉 村 和 美</p> <p>審査委員 准教授 石 田 弓</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、大学生における自己形成と関係的自己の可変性との関連について、質問紙と風景構成法を用いることで、意識的な水準だけでなく、より無意識的な水準も含めて検証を行ったものである。本論文は、以下の4つの章から構成されている。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は、第1節「大学生の自己形成と自己の可変性」、第2節「関係的自己の可変性に関する研究の動向と課題」、第3節「風景構成法を用いて関係的自己の可変性を捉える試み」、第4節「本研究の目的」からなる。第1節では、大学生の自己形成における自己の可変性の問題について述べた。第2節では、関係的自己の可変性に関する研究の動向と課題について述べた。第3節では、大学生の関係的自己の可変性を捉えるために、投映法である「風景構成法」を用いることの意義について述べた。第4節では、以上の背景を踏まえ、本論文では、①大学生の関係的自己の可変性体験を類型化し、各群の心理社会的適応度と自己規定の特徴を明らかにする（研究1）、②関係的自己の可変性体験と自己側面の統合の様相や可変性体験に特有の心理的特徴を、風景構成法を用いて検討する（研究2）という本研究の目的を述べた。</p> <p>第2章「大学生における関係的自己の可変性の心理的特徴」は、第1節「関係的自己の可変性と心理社会的適応との関連（研究1-1）」、第2節「関係的自己の可変性と一体性・分離性との関連（研究1-2）」からなる。研究1-1では、関係的自己の可変性と心理社会的適応との関連を明らかにするため、関係的自己の可変性を測定する尺度で大学生を分類し、それぞれにおける精神的健康度と自我同一性の様相を検討した。その結果、関係的自己の可変性の3指標において性差が見られ、可変性体験のパターンとして男女ともに3群が見いだされた。そして、各群で精神的健康度と自我同一性に違いが見られることが示された。研究1-2では、関係的自己の可変性体験と自己形成との関連を明らかにするため、自己規定の観点から関係的自己の可変性体験3群の特徴を検討した。その結果、男女それぞれにおける3群に特有の自己規定のあり方が示された。</p> <p>第3章「風景構成法からみた関係的自己の可変性」は、第1節「風景構成法に表現される大学生の心理的特徴（研究2-1）」、第2節「関係的自己の可変性3群における自己統合の様相（研究2-2）」、第3節「関係的自己の可変性3群の心理的特徴（研究2-3）」からなる。</p>			

る。研究 2-1 では、風景構成法を集団施行した際に表現されやすい大学生の心理的特徴を明らかにするため、描画構成とアイテムの描画特徴について検討した。その結果、①立体・遠近表現のない構成型は少なく、そこには集団法の影響が反映されている可能性があること、また、②構成型では性差が見られなかったが、描画特徴にはいくつかの点で性差があることが示された。研究 2-2 では、関係的自己の可変性の体験パターンによって自己側面の統合の仕方に質的な違いが見られるかどうかを明らかにするため、関係的自己の可変性体験 3 群と風景構成法の描画構成との関連について検討した。その結果、男女ともに各群において特徴的な構成型が見いだされ、可変性体験によって描画の空間構成の仕方に違いがあり、風景構成法を用いることで各群の自己統合における性質上の違いや可変性体験の質的な違いをアセスメントできる可能性が示された。研究 2-3 では、関係的自己の可変性体験 3 群に特有の心理的特徴を風景構成法の描画指標から検討した。その結果、男女それぞれの群において、いくつかの描画指標で違いが見いだされ、風景構成法を用いて大学生の他者や外界との関わりにおける問題点をアセスメントできる可能性が示された。

第 4 章「総合考察」では、第 1 節にて「本研究の成果」を示し、第 2 節にて「本研究の限界と今後の課題」について述べた。

本論文は、大学生における自己形成と関係的自己の可変性との関連に関する臨床心理学的研究として、次の 3 点において高く評価することができる。

- 1) 関係的自己の可変性の程度や動機、違和感の組み合わせから大学生を分類し、関係的自己の可変性の体験パターンには、男女ともに 3 つの群が存在することを明らかにした。
- 2) 自己の可変性に対して否定的な大学生では、自覚的な適応度が高く、葛藤を感じている大学生では適応度が低いことが示され、自己規定の仕方によって可変性の体験のされ方や適応度の自覚が異なる可能性が示唆された。
- 3) 関係的自己の可変性体験 3 群の心理的特徴について、投映法である風景構成法の描画構成とアイテムの描画特徴の観点から検討し、可変的な自己をどのように統合していくかについての示唆を得ることができた。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 27 年 2 月 10 日